

「日本基督同胞教会史」研究会
機関紙『同胞』を継続して読む
～第213号(1927年)から第233号(1929年)まで～

木村 拓己

はじめに

世界恐慌を前にした切迫した国際情勢が窺える。経済的に疲弊した国際社会は軍事費削減を目指し、1927年にジュネーブ海軍軍縮会議を開催した。補助艦（巡洋艦、駆逐艦、潜水艦）の建造制限を設けて軍縮を目指したが、仏・伊が参加を拒否し、日英米で協議を開始したが、英米が対立し、不調に終わった。その後、1930年のロンドン海軍軍縮会議で建造制限が条約締結された。補助艦制限では仏・伊が審議離脱、日英米の三国間で7:10:10で合意。主力艦制限では、五カ国が1936年までの五年間建造中止に合意した。

1930年はすでに世界恐慌に入り、条約締結は世界に評価された。しかし国内では「軟弱外交」と考える軍部や右翼により、「統帥権干犯問題」が訴えられた。日本軍は政府の統制を離れて独自の行動を強め、翌1931年9月柳条湖事件を契機に満州事変をおこし、一気に日中戦争へ向かうこととなる。

こうした歴史背景の中で、基督教合同問題もまた大きな関心事となっていることがわかる。とりわけ同胞教会では、その教派的背景からも、合同への積極的な期待が感じられる。しかし、容易に合同を進めることができない実情も吐露されている。

この合同が人為的に無理に押し付けられているものか、なんら外部的権威強制によるものではなく、主イエスの精神なる内部的なる良心の自由判断によらねばならぬ、と柳田文吾が第213号で指摘したのは興味深い。

また、数十年後、あるいは数百年後の後に、おそらく農民クリスチャンによって都市教会が援助されることもあるのではないかと農村伝道と教派合同の大切さを第220号で指摘する矢部喜好の視点にも驚かされる。

現代の私たちが今なお抱える諸問題を予期するような彼らの論点には大いに学ばべき点があるのではないかと。以下、各号の特徴的な部分を抜粋して記す。

1920年頃の主な出来事

- 1918年 第一次世界大戦終結
- 1919年 パリ講和会議、ベルサイユ講和条約
- 1920年 国際連盟発足（日本も加盟）
- 1923年9月1日 関東大震災
- 1925年 普通選挙法公布（納税要件撤廃、選挙権は満25歳以上の「男子」）
- 1928年 初の男子普通選挙
- 1929年～32年 世界恐慌

機関紙『同胞』 第213号 1927年（昭和2年）8月15日発行

世界恐慌を前に、逼迫する軍事費のための軍縮会議が開かれた当時の様子が窺える。巻頭言「神の国と平和」（矢部喜好）では、当時のローマ帝国支配と1927年当時の世界に触れつつ、富国強兵や弱肉強食という言葉が散見されている。日英米の三大強国によるジュネーブ海軍軍縮会議が開かれたことに触れ、祈りのうちに注視していたが不調に終わったことは遺憾と報告される。

「基督教合同問題」について協議が始まった様子が報告されている（同胞教会合同調査委員 柳田文吾）。これは1941年の宗教団体系法に先立って、教派間の自発的な合同の可能性を探るものである。しかし、一教派に偏執しつつある風潮、また利害に目を向けて合理的に考えようとする意向が感じられるために、それらへの反対を記すと共に詮議を仰いでいる。

機関紙『同胞』 第214号 1927年（昭和2年）10月1日発行

米国の日本に対する支援縮小が検討される中、ジグラー博士や滞米中のニップ宣教師夫妻を中心に、日本の教会会堂建築への支援の必要性が訴えられる。米国婦人伝道会の呼びかけにより、9月第四日曜日の席上献金が日本の会堂建築のためにささげられたことが報告されている。

巻頭言「教会合同の意義と実際」（矢部喜好）では、国内にはプロテスタントの教派が30あり、6000万の国民に対して50万余りのクリスチャン勢力がある（日曜学校生徒を含む）。すなわち1%に満たないにもかかわらず、さらに三十分割されているのは何事か。なぜ30の教派は各々城壁をめぐらして自己の小康に満足しているとは何事か。今日の教会は居眠っているのではないかと指摘される。教会合同の問題は極めてデリケートだが、類似の教会から実行に着手していけば、

近い将来、希望の光を見るに至るのではないかと願ってやまないと括られる。

別の記事で横田格之助は、同胞教会が二十年間同志社神学校を依託神学校としてきたが、反対運動も起こらずにこれを是認してきたことから、速やかに組合教会と合同するのが自然であると触れている。

本間重慶は、各教派の教会が同じ地域に立っていて、それぞれが牧師手当、伝道費、会堂家賃、電気代、暖房代を支出していることを指摘する。とにかく、合同による利点と要点を示し、第一に小さな教会が合同して自給教会となること、第二に合同によって手が空いた教役者を新伝道地へ送ることを述べている。

また災害についても記される。関東大震災で頭を殴りつけられたような経験をしたはずなのに、1926年北丹災害、さらには今夏の南九州の台風水害と、神の愛の鞭を受けても悔い改めることをせず、わが国民は禍いなるかな、と記されている。

なお、機関紙『同胞』は毎月15日発行であったが、第214号より毎月1日発行となった。そのため9月は休刊となったと編集室だよりに記されている。

機関紙『同胞』 第215号 1927年（昭和2年）11月1日発行

関東大震災について、大久保教会月報が転載されている。あくまで災害に関して触れる内容にとどまっている。

巻頭言「伝道の中心点」（矢部喜好）では、「基督教徒の目標は神の国の建設であり理想社会の実現である。教会の着眼点は社会的でなければならぬ。」と記される。また「教会が線香花火的な一時の現象に満足せずして、深みに漕ぎ出て罪の淵に沈みつつある兄弟の救いを完成せねばならぬ。」と指摘される。

家庭日曜学校（家庭SS）について記されている。SS教師等の午後の1、2時間と、信者の家庭の開放によってSSは生まれていく。大津教会に3個、膳所教会に3個、農村伝道部の方で2個、都合8個のSSが大津膳所両教会にあり、さらに2個が開設予定と報告される。大津と膳所の各本校115名に対し、6つの分校は実に250名に上ることから、家庭日曜学校の意義が強調される。

機関紙『同胞』 第216号 1927年（昭和2年）12月1日発行

「秋の聖戦」と呼ばれる特別伝道の実施報告、また各教会の報告がなされる。「目を挙げて見よ！田の面は既に色付けり。亡びゆく靈魂の収穫に勤しむ諸兄弟の奮闘を祈りて止まず。」と矢部喜好は激励する。秋期特別伝道報告として、草津（250名）、守山（350名）、馬場（180名）、大津（200名）、膳所（二日で1,100名）、瀬

田（250名）と報告される。

機関紙『同胞』 第217号 1928年（昭和3年）1月1日発行

年頭言「感謝—懺悔—希望」（矢部喜好）では、一昨年の大正天皇崩御後は「七千万同胞著しく暗い淋しい気持ちで暮らした」が、昨年は静かに「幸いなるかな、悲しむ者！」との御言葉を聴いたと始まる。「欧州大戦後の好景気に奢っていたわが国民は不景気のどん底に投げ込まれてようやく目が醒めかかった。飽くことを知らなかったわが同胞は無感謝病から癒やされて健康者の歩みを踏み出した。」新たに歩もうと呼びかけられている。

機関紙『同胞』 第218号 1928年（昭和3年）2月1日発行

巻頭言「学生青年諸君に訴える—青年よ、熱意あれ、決断あれ！」（矢部喜好）では、来る二月二十六日の万国学生祈祷日の礼拝に向けて、青年たちに呼びかけがなされる。「この神の召命を聴きこれに絶対服従して十字架精神の体験に突き進むには、新島襄の忠誠、石井十次の純真、矢嶋揖子の男気、賀川豊彦の熱心を要する。」と教派を超えた一致を意図するような言葉が記されている。

「湖南冬期学校第3回農民強化講習会」報告では、閉会式での決議文が掲載されている。

<決議文>

- 一、基督教に都市伝道と農村伝道の別あるべき筈はなし。吾人が農村伝道を主張する所以は、我が国今日の伝道が極端に都市に重くして、農村に軽きを以ってなり。
- 二、吾人は我が国の都市の諸教会が人口の過半を占むる農村の伝道に対して強き責任を感じ、組織的方法を講じてこれに経済的援助をなすにいたらしむるよう努め、之が実行を期す。
- 三、吾人は農村社会科学の研究、農村伝道方針の確立を期し、我が国基督教徒が農民救済のために誠意ある討議発表をなすにいたらんことを希望す。
- 四、吾人は左の希望を有する。
 - イ 農村伝道委員会を設立する
 - ロ 農村伝道に対して各教派の歴史を調査する。
- 五、吾人は我が国の各教派が農村伝道者をして定住せしむるよう希望する
- 六、吾人は全国各神学校が農村伝道講座を設けるに至ることを希望す。

機関紙『同胞』 第219号 1928年(昭和3年)3月1日発行

年会において教派合同に向けた議論を求める文言が散見される。立脚点を明らかにしようとする意図があるのか、あるいは同胞教会に新たに加わった信徒たちに向けたものであるのか、「基督同胞教会物語」が記されている。

以下、現代仮名遣いにて引用する。

基督同胞教会は18世紀の後半に北米合衆国に移住した獨乙人の間に起こったアルミニウム派の神学を奉ずるプロテスタントの一教派である。第一回の年会を開いて新宗教団体の誕生を宣言したのは一七八九年であるが、その濫觴(らんしょう)はさらに一七六八年に遡ることができる。これより先、一七五二年七月にはるばる大西洋の荒浪を横切って新大陸に住む在米獨乙人のために生命のパンを分かつべく渡米したオッタバインと云う篤学敬虔なレフオームド派の宣教師があった。彼はペンシルベニア州の小都市ランケスター、ヨーク等で十数年忠実に伝道したが、どうにかして「牧ふ者なき羊」を救わんとする熱意から最寄りの村々に手を伸ばして農民の伝道に努力していた。

一日ランケスター郡の特別伝道を計画している時、アイザック、ロングと呼ぶ農家でバームと云うミネナイト派の宣教師が伝道していることを耳にし、同じ農村で二つの信仰復興運動をするよりはバームを助ける方が神意に叶うものと考えて、その伝道会に出席した。そしてバームの力ある説教が終わるや、オッタバインはつかつかと進み出て、バームの手を握り、「Wir Sind Brüder(我等は同胞なり)」と叫んだ。今までは両派の間に深い溝があつて互いに交わる機会がなかったが、この美しき同胞愛を目撃して集会に参加した信者も未信者もいたく感激し、ある者は讚え、ある者は感涙した。これは一七六八年のことであつたが、爾来二人は超教派的同胞主義の下に、火を吐く如き熱をもって未開地の伝道にいそしみ、瘦せ馬に鞭うって「狂えるの如く」農村を馳せ巡つたその結果、改心者の団体が多数組織せられその戦線の広げられるに従い、伝道者任用の制を定め、事務会年会を開く必要を生じた。

元来、オッタバインもバームも母教会を去って新しい教派をつくる考えを持っていなかったようで、第一回の年会も実は一種の修養会であり、異なった教派の有志が組織した伝道隊の如きものであつたと思われる。その後一八〇〇年の年会において各所に散在する諸団体を合して一教派となす議が決せられ之を基督同胞教会と名付けたが、上述の如く基督同胞教会は教会を去つた者の組織した新教派ではなく、教会にあつて教派連合の働きを進めた人たちがその教派から排斥せら

れて所属教会がなくなったため、止むなく同胞団を造りこれが後年の基督同胞教会となったものである。さればその創立の始めから宣教精神に燃えていたのは当然で、第一回年会で採用せられた五箇条の信仰告白にも「聖書によって教えられたる救済の奥義は広くこれを全世界に宣べざるべからず」(第五条)とある。また米国同胞教会はその初期に於いて農村及び小都市の伝道に力を注ぎ都会伝道を軽視する傾向があったため、経済力も会員数も他教派の如き大勢力とはならなかったが、それでも現在四十万にいたる信徒があり、西アフリカ、支那、ヒリツピン、ポートルコ等に有力な伝道地を有している。日本に於いては明治三十一年に初めて伝道を開始し、同三十四年に第一回の年会が開かれた。第十回年会の報告によれば、信徒五百人献金額千五百圓であったが、第二十回年会には信徒千五百人献金八千圓となり、昨年(昭和二十七年)の第二十七回年会には信徒千七百人献金一万八千圓を超え、四つの自給独立教会を有することが報告せらるるに至った。

機関紙『同胞』 第220号 1928年(昭和3年)4月1日発行

巻頭言「新時代と教会」(矢部喜好)では、「新時代の政治は帝国主義的ないし軍国主義を緩和して、我らが長年主張してきた国際主義・平和主義が勝利を得るだろう。統一主義に固執する公立学校は漸次改善せられ、自由主義の私学が勃興し、小規模な宗教学校が国民に迎えられる時が来るだろう。…基督教会盛衰の鍵を握るのは教会自身である。教会はよろしく『時代の徴』を觀て新時代を指導し、理想社会の実現に貢献せねばならない。」と展望され、合同の必要性と未開拓地への伝道が訴えられている。

特に、農村伝道の具体的計画を立てるべきと指摘していることは興味深い。「数十年後、あるいは数百年後の後に、おそらく農民クリスチャンによって都市教会が援助されることもあるのではないか。小アジアの教会がエルサレム教会を助けたように、隅の親石となることもあるのではないか?」との言葉は、現代にも大きく響いている。

中山鹿次郎(と思われる)もまた、農村伝道について述べている。現代の牧師は都市伝道のために養成された人々であり、農村出身者であっても、伝道は都会でするものだと考えており、すでに農村伝道に適さない人になってしまっていること、またある人は、都会で通用しない人が田舎に行くものと考えている。そうではなく、都会伝道のできる人が使命を感じて農村に行くべきなのだと展開している。また、「農村の教会だから農村内にあるのが当然だと考える人が多いようだ

が、農村に教会をおいてはならない」との指摘は鋭いと言える。

機関紙『同胞』 第221号 1928年（昭和3年）5月1日発行

巻頭言には年会式辞「開かれたる門と逆らうもの」（ニップ）が掲載されている。普通選挙の実施、政治の民衆化に伴って、日本の基督教界にも新しい時代が来たと始まる。子どもや青年に対する教会教育、それを通じて父兄をも共に一層導く必要があり、そのためにも教師養成もまた急務であると述べられる。

調査では、八時間労働制、少年労働の廃止、婦人夜業禁止等に関する工場法の改正が掲げられているが、財界不振と生活困窮のためにうまく進んでおらず、実態に合っていないと指摘されている。日本の教会は、新しき社会制度に対して理想と組織とを用意しておかなければならない。新しき社会、そこではすべての人と人との関係は人格の上に築かれ、個性が尊重される。こうして文明の発展へとつながるのではないかと指摘する。

「宣教の働きを妨げるものは、福音を知らない人である。しかしそれより大きな妨げは教会員であり、親密な牧師や伝道者であり、妻である。最も大きな妨げは自分自身である」と語った支那の宣教師の言葉を痛感する、とニップは括っている。

そのほか別の記事では、御即位御大典記念伝道および献金の実施、各地方に適応した伝道計画の立案、「一人が一人を」主義の伝道を進めることが語られている。

機関紙『同胞』 第222号 1928年（昭和3年）6月1日発行

年会後の発行のために簡素な構成であり特筆すべき事柄はない。

随想「教会に来る人に願わしいこと」が掲載されており、おそらく矢部喜好による執筆と思われる。「教会の集まりは自分の家で招待したのだという気分であってほしい」と始まる記事は、礼拝時の教会員の姿勢について述べられている。聖書や讃美歌を持っていない人がいないか、ページがわからない人はいないかと気を配ること、自分だけ良い気持ちでいるのは醜態だと指摘する。

多種多様な教派出身の信者が客員として集まり、そこに各自の信仰に自由が与えられ、しかも神による統一があり、誰も彼も自分の教会として安住し、奉仕する教会は、教会の空気が生き生きとしていると言える。その精神のあるところには、牧師は信者をして自分以上のものたらしめ、古参信者は新参者を自分以上のものへ進めようとする気風がある。

これらの教会形成に関する一考察は現代にも十分通じているのではないか。

機関紙『同胞』 第223号 1928年（昭和3年）7月1日発行

1928年6月に二つの宗教大会が開催されたことを受け、第223号はその論説と印象、批判を掲載している。東京の日本青年会館で開催された「日本宗教大会」では神道、仏教、キリスト教の代員約1000名が集まり、6月14日～18日、同所で全国基督教協議会（基督教聯盟主催）では「我が国将来の伝道方針」と掲げ、約220名による討議と懇談がなされた。

巻頭言「我国将来の伝道方針—基督教協議会の収獲」（矢部喜好）では、全国基督教協議会の詳細が記され、同大会には基督教聯盟に加入する教派のみならず、日本聖公会、同仁、普及福音、芬派ルーテル等の招待代員に加え、日本ハリストス正教会主教セルギー氏も出席した極めて広汎な会議であったと報告されている。

機関紙『同胞』 第224号 1928年（昭和3年）9月1日発行

巻頭言「基督教会の前進」（矢部喜好）では、「行き詰まり」という言葉が世間でよく聞かれるようになり、全国基督教協議会でもしきりに用いられていたが、宗教家の会合で聞かれるほど不快なことはないと痛切な批判がなされている。英米式の型に捉われている日曜学校の改革、教会附設の幼稚園経営と労働青年男女の夜間基督教教育、基督教学校（ミッションスクール）の改善等、我が基督教界の指導者たちに進路を示してほしいものが多々あると、矢部のビジョンが明確に表されている。

ちなみに、1928年8月1日発行分はSS教師講習会、夏期学校等のために発行できなかったことのお詫びが掲載されている。これを受けて、第229号では9月1日発行の第224号より号数を1号ずつ訂正する旨が記されている。あとで見返す際に、年間発行回数12回と号数がずれていくことを懸念し、便宜上8月は未発行だが1号分と数えたと考えられる。

機関紙『同胞』 第225号 1928年（昭和3年）10月1日発行

1928年7月11日、「第10回世界SS大会」（ロサンゼルス）が報告される（本田釜次郎）。

1928年7月11日午後2時 米国ロサンゼルス市シュライン・シビック・オーデトリウム

会衆約8000名、うち日本人約300名（外国来会者中の最大多数を占める）。

定刻、ステージの幕が上がると、カリフォルニア州知事やロサンゼルス市商業

会議所会頭、大会会長、その他各国代表がステージに居並び、その背後には1300名の聖歌隊がいて、明るい光線にまばゆく照らされていたので、思わず拍手をして迎えた。

合唱ののち30分間のデボーションと礼拝が行われ、知事などの歓迎の挨拶があった。アフリカ、アジア、オーストラリア、ヨーロッパ、南アメリカの代表者がそれぞれ挨拶した。アジアからは日本人の千葉博士が語った。

開会式後に迷子になったが、日本人メソヂスト教会の人々に助けられ、夕食までご馳走になった。南カリフォルニア自慢の果物が山ほど積まれ、遠慮なくいただいた。そのうちにたくさんの人が集まるようになり、30名分の用意された夕食に80名が集まってしまいました。果物をいただいているところに炊き出しをやって、にぎりめしとおにしみとたくわんで一同が感謝して食べた時は、全く震災当時の光景そっくりでした。

夜はプール博士の講演会でした。会期中第一の演説でした。よくわからない私たちまでがその雄弁に魅せられました。「財産ではなく人格であり、金銭でなく人間であり、弾丸でなく投票権である。」とアピールされた時、会場から盛大な拍手が巻き起こりました。

機関紙『同胞』 第226号 1928年(昭和3年)11月1日発行

巻頭言「謹んで御大典を祝す」(矢部喜好)では、1928年11月10日に京都御所で行われる昭和天皇即位礼について触れられている。またコネチカット州のハートフォード神学校に到着した定森次郎より矢部宛の手紙が掲載されているほか、第10回世界SS大会略記②、膳所日曜学校からは「日曜学校における高等科の礼拝と聖句」について寄稿されている。

機関紙『同胞』 第227号 1928年(昭和3年)12月1日発行

全国基督教徒御大典奉祝式について記されている。

11月11日の聖日午後1時45分より、全国基督教徒御大典奉祝の式は、禁庭にもいと近き同志社大学校庭において行われた。式は京都基督教連盟委員長なる京都同胞教会安田牧師司会の下に厳かに開かれた。毛利官治氏の聖書朗読、早川喜四郎氏の開会祈祷、全国基督教徒を代表して小崎弘道氏の式辞、鷗崎庚午郎氏の祈祷あり、会衆一同讃美歌三七三並に御大典奉祝歌を高らかに歌い奉り、更に宣教師を代表してミラー博士、中華全国基督教徒を代表して誠静治博士、首相代理

井上秘書官、文相代理安藤参与官、海老澤連盟総幹事の祝辞ありて後、東北大学総長長井上仁吉博士の発誓にて萬歳を三唱して莊嚴裡に式を閉じた。

そのほか、大津同胞会館献堂記念説教（千葉勇五郎）、宗教改革記念日の講演（佐藤繁彦）、第10回世界SS大会略記③が報告されている。

機関紙『同胞』 第228号 1929年（昭和4年）1月1日発行

昭和4年の教会暦が掲載される。紀元節や天長節、新嘗祭に基づく収穫感謝礼拝の記載がある。また、決議された日本基督教連盟社会信条がまとめられている。

(1) 昭和4年の教会暦

1月6日～12日 万国祈祷週間

2月3日 世界共励会記念日 10日 紀元節礼拝日

3月24日 万国学生献身日 24日～30日 受難週間 31日 復活祭

4月28日 天長節礼拝（木村注記：4月29日の昭和天皇誕生日）

5月5日 青年の日

6月2日 花の日、オッタバイン記念日

8月中旬 追悼会

9月1日 震災記念日、酒なし日

10月上旬 克己週間

11月3日 世界禁酒日曜日 10日 世界平和記念日 14日 感謝礼拝（新嘗祭に近い日曜日）

12月1日 聖書日曜日 25日 降誕節

(2) 日本基督教連盟 社会信条

我等は神を父として崇め、人類を兄弟として相親しむ基督教的社会生活を理想とし、基督によって示されたる愛と正義と平和とを実現せんとするものである。

我等は一切の唯物的教育、唯物的思想、階級的闘争、革命的手段による社会改造を排し、進んで基督教教育の拡張を計り、身を以て社会問題の解決に当らんとする士人の、我等の間より多く出現せんことを祈るものである。

我等は社会の組織体の中に基督の生命を活かし、これによりてのみ当今の悩みは救はるべしと主張し、且つ富は神よりの受託物にして、神と人とのために捧ぐべきものと信ずるものである。

この理想に基づき、我等は左の条項を主張する。

一、人の権利と機会の平等

- 二、人類及び民族の無差別待遇
- 三、婚姻、貞操に対する男女同等の責任、家庭生活の保護
- 四、女子の教育、社会、政治および産業界における位置の改善
- 五、児童人格の尊重、少年労働の禁止
- 六、日曜日公休法の制定（賃銀の支給を予期す）
- 七、公婚制度の廃止、およびこれに類する事柄の徹底的取締
- 八、国民的禁酒の促進
- 九、最低賃銀法、小作法、社会保険法、国民保険に関する立法
- 十、生産および消費に関する協同組合の設置
- 十一、＜判読不可＞
- 十二、労働者教区の普及および徹底、合理的労働時間の制定
- 十三、所得税および相続税の高準的累進法の制定
- 十四、軍備縮小、仲裁裁判の確立、無戦世界の実現

以上は今冬11月12日、東京において開かれた第6回日本基督教連盟総会において議決制定されたものである。

機関紙『同胞』 第230号 1929年（昭和4年）2月1日発行

本来は第229号だが、第224号（1928年9月1日発行）より号数を1号ずつ訂正する旨が記されている。

巻頭言「教会の建設と会堂の建築」（矢部喜好）では、教会形成と他行会員について語られている。教勢報告を見ると、いつも現住会員と他行（たぎょう）会員Aに比べて、他行会員Bとして記録する人たちが多く、事実を甚だ遺憾に思うと矢部は述べる。これは、おそらく不在会員と別帳会員を指している。

B会員は相当の年配となってから教会に繋がっている人が多いと思われる。矢部は指摘し、日曜学校教育に力を注ぐことを訴えている。また、国民生活を見るときに、その移動性が日を追って甚だしくなっていると前置きし、教会所在地から移動していく会員に対して、その地の教会に対し忠実な基督者としてなすべきことを訴えている。

ハワード博士は、日本の教会員は教会よりも、むしろ牧師に対して強く結び付けられていると言われたことを引き合いに出し、日本の教会および教役者は格別の留意をなす必要があると指摘している。

機関紙『同胞』 第231号 1929年(昭和4年)3月1日発行

巻頭言「年会の根本問題」(矢部喜好)では、年会への展望が語られる。昨年11月全国基督教協議会が開催された際、英・米宣教師が母国の国籍を脱して日本人となるが良いという提案があったことに触れ、論議の火花を散らしている真っ最中に賀川豊彦氏が立ち上がり、「これは宣教師が英・米人としてとどまるか、帰化して日本人となるかという単なる戸籍問題ではない。彼らが靈魂の国籍が確かに天にあれば肉体の国籍はどちらでもよいではないか」と叫んだという。

年会の中心問題は「教会の建設」であり、教会建設の基礎は教会員の信仰確立問題である。去る一ヶ年伝道の足跡を顧み、召されし聖寵に対してただ懺悔の涙あるのみである。不信、不遜、不忠実、不徹底にして、「主よ今年も赦し給え！」と祈らざるを得ない。これは牧師も代員も真面目に反省すべき年会の根本問題であると括っている。

機関紙『同胞』 第232号 1929年(昭和4年)4月1日発行

第29回年会要録、式辞(安田忠吉)や記念礼拝説教(横田格之助)が掲載されている。また、今号より9ポイント活字となり、字数は約二割五分増加したことが報告されている。

「年会後記」(矢部喜好)では、年会の中心問題は「教会の建設」であったことに触れ、植村正久先生の言葉を紹介している。「教会に二つの種類がある、成長の教会と延長の教会であると言われた。成長する教会は、その細胞がだんだん分裂し増大していくが、しかもそれが相連なり相結合して分離しない状態でなければならない。」

牧師一人が活動しても、そこに教会の成長はない。役員信徒が牧師と共に神の国のために働くことによって初めて細胞の分裂がある。それが分離しないためには、個々の役員信徒が能力あると共に靈的信仰者であることが必要である。そうでなければ教会はいつまでも、ざるで水をこすような状態を続けねばならないと矢部は述べている。

機関紙『同胞』 第233号 1929年(昭和4年)5月1日発行

大津馬場基督教青年会館内に「馬場同胞幼稚園」が開園し、園長にニップ夫人が就いたこと、37名の園児が集まったことが報告されている。

巻頭言「幻なき民」(矢部喜好)では、同志社大学チャペルでの海老名弾正の訣

別説教に触れられている。「私の中に若々しい精神がある。この精神は私を捨て去らずにいつまでも随って行く」と三十歳のシュライエルマツヘルを引用した七四歳の海老名に若々しさを矢部は見る。

現代は幻を失った時代のように思われる。幻なき民は亡ぶ。神は常に我らにその幻を与え、我らを励ましてこれを遂行せんとしておられるのである。人間平等の幻、不戦世界の幻、わが同胞教会は、多くの幻の一つとして、五ヵ年計画の遂行の幻を見ている。それが到底実現し得ざる幻であると言うものは言え、我らは幻ある所にこそ生命あることを疑わず、幻なき民には滅亡のほか何もないことを信じて、まっしぐらに進もうではないかと述べている。